

狩人の時代〜旧石器時代

旧石器時代とは

今から4万年〜1万6千年前の旧石器時代の人々は農耕を行わず、打製石器や骨角器などの道具を使い、狩猟や採集活動を行っていました。土器を製作していないことから「先土器時代」とも呼ばれています。

当時の環境

旧石器時代は、寒冷化した氷期と温暖化した間氷期が交互に訪れた時代でした。なお、現在は間氷期にあるとされています。約2万年前の最も寒い時期には、年平均気温が7〜8度も低かったとされています。現在の水戸地方の平均気温と比較すると、網走地方の気温に当たります。氷期には、氷河や氷床が発達することから、海水面は現在よりも80〜140メートル低かったと考えられ、日本列島は大陸と陸続きとなっていました。

厳しい環境下での生活

当時の人々は、大陸から渡来したナウマンゾウやオオツノジカなどの

大型哺乳類を狩猟し、木の实などの植物資源を獲得しながら、移動を繰り返す「遊動生活」をしていました。そのため決まった場所には定住せず、住居はテントのような構造をしていただけと思われます。寒冷な気候、活発な火山活動により火山灰が降り注ぐ、厳しい環境下での生活でもありました。

旧石器時代の道具

狩猟や採集活動のための道具には、石を打ち欠いて作られた打製石器や動物の骨や角を用いて作られた骨角器などがあります。狩猟具は、その形から尖頭器、ナイフ形石器、台形様石器と呼ばれており、槍の先端につけていました。そのほか、穴をあけるための石錐、皮なめしに使う搔器、木の実をすりつぶすための磨石などがあります。



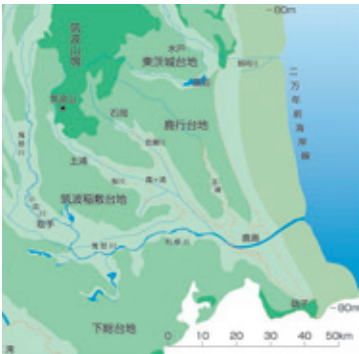
尖頭器
(権現平遺跡出土)

石器の材料

石器の製作に適した石材は、「硬質」、「割れ口が鋭利」、「加工が容易」であることが求められます。具体的には、黒曜石、サヌカイト、ガラス質黒色安山岩、メノウ、硬質頁岩、チャートなどです。これらの石材はどこでも手に入るわけではなく、産出地が限定されます。チャートやガラス質黒色安山岩は、茨城県北部でも産出されますが、東北地方(硬質頁岩)、栃木県高原山・箱根・神津島(黒曜石)などの遠隔地から運ばれたものもあります。

小美玉市の旧石器時代遺跡

市周辺の旧石器時代の地形は現在と異なっていました。現在の霞ヶ浦は陸地であり、針葉樹と広葉樹が混在した森が広がる台地は、河川の浸



約3〜2万年前の霞ヶ浦周辺の地形(霞ヶ浦環境科学センターホームページより)

食により、谷が刻まれていました。

市内17遺跡で尖頭器などの石器が確認されているため、旧石器時代の人々が生活していたものと考えられます。3遺跡で出土した石器をご紹介します。

権現平遺跡(下玉里) 2か所の石器集中地点から合計22点の旧石器時代の石器が出土しています。尖頭器(硬質頁岩・ガラス質黒色安山岩)、搔器(ガラス質黒色安山岩)などが確認されています。これらは玉里史料館に展示中です。

大作台遺跡(高崎) 19点の石器が出土していますが、道具は石錐一点のみです。その他の大部分は石器で石を打ち欠いたときにできる剥片と呼ばれるものです。石材の産地から運び込まれた途中で不要になった石材を廃棄したものと思われる。

鷺沼遺跡(野田) 2点の尖頭器が確認されています。蛍光X線分析法の結果から、石材の黒曜石は栃木県高原山産であることがわかりました。

語句解説

蛍光X線分析法 X線を試料(石器)に照射した時に発生する蛍光X線のエネルギーや強度から、物質の成分元素や構成比率を分析する手法。